

ITI Scholar NEWS

vol.16 (2024, September)

ITI Section Japan



ITI スカラー通信第 16 号をお届けします

岩内洋太郎先生

University of Basel

(Basel, Switzerland)

スイスのバーゼル大学（UZH）に留学中の岩内洋太郎と申します。時が経つのは早いもので留学生活もあと少しになってしまいました。振り返ってみると本当に多くの経験をすることが出来、全てお伝えするのは難しいですが、その中でも特にお伝えしたいことを書ければと思っています。

まずは私の研究プロジェクトについてですが、ティッシュレベルとボーンレベルインプラントの前歯部カンチレバーインプラントへ、ジルコニア上部構造（4Y/5Y-PSZ）を用いた際の経年劣化と、インプラントの種類がどの程度影響するかの研究でした。結果も非常に興味深い内容になり、先日無事論文投稿を行うことが出来ました。当初1年という短い留学期間で *in vitro* 研究とはいえど、実質半年程度で結果を出して論文を書き上げるというのは、厳しそうで不安もありましたが、Supervisor 含め優秀な仲間のサポートもあって仕上げる事が出来、本当に感謝です。内容も私の専門分野でもある Digital dentistry を駆使した、直接臨床にも関連する内容であり、いつか皆様にご報告できる機会があれば嬉しいです。何より論文を執筆する中で一番感じたことは、如何に世界のオピニオンリーダー達が横の繋がりを持って、様々なエビデンスを世界に発信しているのかということです。この留学を通して多くのリーダー達と出会い、知り合う機会を ITI は私に与えて下さりました。今までは論文を読んでも、その執筆者の先生の顔や、そのチームワークといったバックグラウンドを知る由もありませんでした。その中でもスイスの4大学が世界でリーダーシップを執っている事実を、この留学を通して肌身で感じる事が出来たのは自分にとって大きな財産ですし、ほんの微力ではありますが共にその一端を担えたというのは自分の人生にとって宝物です。

前回は日々の臨床について書きましたが、今回は学生教育システムについてお伝えしようと思います。スイスの歯科大学カリキュラムは5年制になっており、座学は3年までに一通り終わらせます。そしてこれは私が一番驚いたことでもあるのですが、4・5年次は2人のペアで1つのユニットを共有して外来を行うのです。UZH では2階のワンフロア全てが学生診療室となっており、各科持ち回りで上級医がヘルプに入るといったシステムです。現在の日本の歯学教育ですと、5年次で上級医の診療見学や介助がメインとなるポリクリですが、そのような内容はこちらでは3年次に行っており、日本とは全く異なる教育システムです。4・5年次は1日中診療ではなく、半日弱は講義の時間に充てられており、お世辞抜きにして非常に高度な内容を教えています。また、これも非常に面白く、日本のように一方通行の講義スタイルだけでなく、症例を提示して両方向の対話形式の講義も設けられています。症例に対して考え得る治療方法のスライドを先生が予め用意しており、先生と学生が対話しながら進めていくといったスタイルです。勿論8割程度は通常の講義ですが、例えば教授が講義していても遮って積極的に質問や意見を発言する学生達の姿を見て、我々日本人も見習うべきだと痛切に感じました。スイスの歯科医師国家試験は、日本と同様のマークタイプの筆記試験だけでなく、これも非常に驚いたのですが、加えて日々の

臨床の中で治療が終了した症例の口頭試問試験もあります。終了した症例を学生が選び、その患者を実際に診療室へ呼び、試験官が 30 分のチェアタイムの中で治療経過と結果を確認しながら口頭試問していく形式です。私も半日程度その様子を見ていたのですが、どの症例も素晴らしく、感銘を受けました。勿論上級医のサポートを受けながら仕上げていると思うのですが、卒業前からある程度の歯科治療が出来るようになる教育システムは素晴らしいなと感じました。

今年は運良く、ITI World Symposium が開催される年として、今年の scholar はシンガポールに全員招待され一堂に集う機会を与えてくれました。ご存知のように今は SNS で世界中の人と繋がることが出来ますから、既に SNS で知り合っている友人と会場で会って話すことが出来、そしてまた新たな出会いもあり、素晴らしい機会になりました。実際に先日 Symposium で出会ったハンガリーのセンメルweis大学 Dr. Daniel Vegh の元を訪ね、レクチャーをさせていただく機会も出来ました。また、日本からも多くの先生が参加されており、久しぶりの再会や新しい出会いもありました。中でも塩田先生がわざわざ日本からお菓子を持ってきて下さり、本当に嬉しかったです。有難うございました。さて、Symposium 全体の内容と ITI の進んでいく方向ですが、患者立脚型の治療計画と、抜歯即時埋入・即時荷重のトピックが多かったような印象を受けました。勿論 Digital に関する内容も多く、日本ではまだ導入されていないフェイシャルデータ・IOS データ・CT データの統合が出来、三次元的な治療のシミュレーションを行えて、そのデータを三次元的にエクスポート可能なプラットフォームシステム Smile cloud や、抜歯即時埋入後に使うヒーリングアバットメントが、理想的なプロファイル形態となっており、尚且つ IOS のスキャンボディとしての役割を持つ Fast Molar Solution など、他にも興味深い多くの新商品が発表されておりました。やはりその中でも新しいインプラントである、BLC・TLC インプラントは多くの方の注目を浴びていたのではないのでしょうか。UZB では既に 1 年以上前から使用しており、私もこちらに来た当初は、まさか知らないインプラントがあるなんて夢にも思わなかったので非常に驚きました。今回ブーザー先生を始めとする多くのスピーカーの先生達は、BLC・TLC インプラントのケースや、始動している研究を紹介しておりました。私の UZB での研究に、このインプラントを用いたプロトコルで同僚が研究を始めるので、今後も携わっていく予定ですが、日本での導入時期は未定とのことで、やはり私自身このような日本でのタイムラグには悔しい気持ちがあります。どうすることも出来ませんが、より一層海外で活躍され情報を発信している先生の論文や情報をチェックする他ないのかなと感じます。またメインスピーカーも同様に日本からは 1 人も入っておらず、その一方でスイスからは 10 人以上のメインスピーカーが選ばれており、勿論スイスで学ばせて貰っている私にとっては嬉しい事ではあるのですが、日本人として複雑な気持ちになったのは否めません。恐らく日本からいらした先生達は同じようなことを感じているかと思いますが、私たち若い世代と一緒にこれから頑張っていくしかないと感じました。

さて、日常生活ですが、スイスの夏は天気の悪く日も短い冬とは比べ物にならないくらい素晴らしい日々です。湿度が低く、カラッとした暑さなので私の家はエアコンが無いのですが全く問題なく快適に過ごせました。緯度が高いので日が長いので、夕刻からはライン川を泳いだりランニングしたりしております。また冬にも訪れたマッターホルンにも再度訪れ、また青々とした雰囲気異なる美しさに圧倒され、多くの観光客が訪れる理由

がよくわかりました。スイスの鉄道は日本のように時間に正確で、加えてユングフラウ鉄道など、よくこんなところに作ったなあと思わされる場所ばかりです。スイス国内の観光地にはどこも鉄道で容易にアクセスが可能なので、多くの場所に足を運ぶことが出来ました。特に印象に残っているのはレマン湖を望むことが出来る、世界三大ジャズフェスティバルと言われるモントルージャズフェスティバルにも行くことが出来ました。近年はジャズというよりロックやポップミュージックがメインの音楽祭になっておりますが、美しい街並みとレマン湖を望みながら、その長い歴史を垣間見ることが出来ました。国外ですとスペインのイビザ島、パリ、ベルギーのブリュッセル、アントワープ、ルーベンを訪れ、ベルギーでは昨年の IDS でお世話になった GC の柿木さんに色々案内して頂き大変お世話になりました。最後は、私がお世話になっている Prof. Zitzmann は、Lindhe 先生の元で Ph.D.を取得されており、その縁もあってイエテボリ大学に来週訪れる予定です。北欧は訪れたことがないのでとても楽しみです。

まだまだ書き足りない事が山ほどございますが、それだけ多くの経験をすることが出来ました。スイスという国、そしてバーゼルが心から好きになりましたし、第二の故郷になりました。何よりこの ITI Scholar を通じての一番の財産は出会いだったと思います。これからもより一層日本だけでなく世界にも情報を発信し、出会った仲間と繋がり続けることで世界との架け橋になり、そして留学を志す人の助けが少しでもできればと思います。

最後に、まだ小さい子供と一緒に留学に来てくれた妻、色々サポートしてくれた私の両親と妻の両親にも本当に感謝です。彼女の歯科医師としてのキャリア再開の妨げにはなってしまいましたが、人生にとってかけがえない時間になったのではないかなと願っております。改めてこのような機会をくださった Straumann Japan と ITI section Japan の皆様に御礼を申し上げたいと思います。



シンガポールにて塩田先生と



Prof. Zitzmann の講演後会場にて



今年の ITI Scholar 達とシンガポールにて



ハンガリー Semmelweis 大学にて



ライン川水泳後に娘と



夏のマッターホルンをバックに家族と

ありがとうございました。

